

特別講演 瀬石と熊本

熊本大学教授

首 藤 基 澄

1. 熊本の家

夏目瀬石（慶応3年～大正5年、1867～1916）は、近代日本文学史上、最高位に位置づけられているが、熊本へは、明治29年4月、第五高等学校講師（同年7月教授）として赴任して来、33年7月、ロンドン留学のため上京するまで、4年余滞在していた。その間、瀬石は、実に6回も居を移している。

- 第一の家（明治29年4月より） 熊本市下通町百三番地（光琳寺町の家といわれている。）
- 第二の家（明治29年9月より） 熊本市合羽町二百三十七番地（現在、熊本市坪井2-9-11）
- 第三の家（明治30年9月より） 飽託郡大江村四百一番地（現在、熊本市新屋敷1-16）
- 第四の家（明治31年4月より） 熊本市井川淵町八番地（現在、熊本市井川淵町1-30）
- 第五の家（明治31年7月より） 熊本市坪井町七十八番地（現在、熊本市内坪井町4-30）
- 第六の家（明治33年3月か） 熊本市北千反畑七十八番地（現在、熊本市北千反畑町3）

2. 結 婚

瀬石は、四国の松山中学在任中の明治28年12月に上京し、当時貴族院書記官長中根重一の長女鏡子と見合をし、五高へ赴任後、6月9日に結婚した。二人の結婚の是非は軽々しくは論じられないが、鏡子が明治31年に、白川へ身を投げ、自殺しようとしたということには注目してよい。

3. 俳 句

瀬石は、松山、熊本時代に俳句を能くし、1670句余り作っている。全作品の3分の2にあたる数である。

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| すずしさや裏は鉦うつ光琳寺（明治29年） | 酒を呼んで酔はず明けたり今朝の春（明治31年） |
| 衣更へて京より嫁を貰ひけり（ ” ） | 温泉や水滑かに去年の垢（明治31年） |
| 今日ぞ知る秋をしきりに降りしきる（明治30年） | いかめしき門を這入れば蕎麦の花（明治32年） |
| かんてらや師走の宿に寝つかれず（明治31年） | 化学とは花火を造る術ならん（明治32年） |

4. 文学志望

明治21年、瀬石は一高予科から本科へ進む際、長兄に「文学は職業にならない」と反対されて動揺し、「一旦は、建築家になる決心をした。しかし、友人の米山保三郎（天然居士）に、「日本でどんなに腕を揮ったって、セント・ポールズの大寺院のやうな建築を天下後世に残すことは出来ないじゃないか」等といわれ、文学志望を固めたという。熊本時代の瀬石は、それほど多くの文章を残していないが、数少ない文章の中では、次のエッセイに注目したい。

……若し人生が数学的に説明し得るならば、若し与へられたる材料より×なる人生が発見せられるゝならば、若し人間が人間の主宰たるを得るならば、若し詩人文人小説家が記載せる人生の外に人生なくんば、人生は余程便利にして、人間は余程えらきものなり、不測の変外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で来る、容赦なく且乱暴に出で来る、海嘯と震火は、常に三陸と濃尾に起るのみにあらず、亦自家三寸の丹田中にあり、陰呑なる哉（「人生」『龍南会雑誌』明治29.10）

5. 小 説

熊本時代の体験をもとにして、瀬石は、後年「草枕」（明39）「二百十日」（同）を書いている。初期作品における「人生」について考えてみるのもおもしろい。